とある2人の無能力者

ユウト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある２人の無能力者

【Ｎコード】
Ｎ０８４１Ｚ

【作者名】
ユウト

【あらすじ】
科学の街、学園都市。物語は学園都市の２人の無能力者の出会いから始まった。そして上条当麻と佐天涙子の波乱万丈な非日常が今幕を開ける！！

第０章　それぞれの日常（前書き）

こんにちは。ユウトです。初めての投稿になりますが読んでいただけたら嬉しいです。

第０章　それぞれの日常

深夜の学園都市。
そんな時間帯にも関わらず相変わらず蒸し暑いこの夜に耐えかねた、
黒髪ツンツン頭の少年・上条当麻はむくりと起き上がるとキッチンに足を運んだ。
彼の目的はただ一つ・・・。
「よし・・・インデックスは起きてないな・・・」
冷凍庫の奥深くに眠るアイスクリームだ。
彼がこんな時間にアイスを食べなくてはならないのも、
本来上条がねているはずのベッドの上で気持ちよさそうに寝ている銀髪シスター・インデックスの
暴飲暴食の結果である。
しかし、つい先日・・・彼は冷蔵庫内の彼女の死角を発見するという偉業を達成したのだ。
おかげでこのアイスクリームは彼女の毒牙にかからず安全だったというわけだ。
フタを開けスプーンで純白のアイスをすくい上げる。
（ついに・・・ついにこの時が！！）
それを口に運び久々の至福の時をーー

「と～う～まぁ～～～！！！」
「ひぃぃっ！い・・・インデックスさん！？」
後ろでドス黒いオーラを発している銀髪シスターを見て腰を抜かす上条。
「どうしてとうまは、私が寝ている隙をみてこっそりアイスクリームを食べようとしているのかな？」
「そ・・・それはですね！ええと深い事情が上条さんにもありまし

て」
「問答無用なんだよ！！！」
「ぎゃあーーーー！！？不幸だぁーーーーーーー！！！！！」

同時刻。

とある学生寮で佐天涙子は提出物を必死になって進めていた。
「ああ～・・・もう、今さら机の引き出しからこんなのが出てくるなんてなー」
週末という事もあって部屋の掃除をしていた彼女は偶然にも明日提出期限の課題を、
発見したのであった。
「どうしよう・・・このままじゃ終わらないかも。初春に明日見せてもらおうかな」
始めてから1時間も経っていないのにも関わらずもう諦めモードに入る。
イスにもたれ掛かりふうとため息をつき、
「とりあえず初春にメールしておこっと」
机の隅に置いてあった携帯に手をのばす。

「はぁ～…眠いなー」
四時限目が終わり昼休みに入って上条が始めに口にした言葉がそれだった。

結局あの後、インデックスに噛まれた傷が傷んで一睡も出来なかったのだ。
それに朝家を出る際、
「罰として今日同じアイスクリームを１０個買ってくるんだよ」
「で、でもなインデックス。上条さんは家計的に絶賛絶望中であってだな」
「買って来なかったら分かってるよね？」
「はい、すいません」

などという約束を交わしてしまっているので尚更のこと、上条のやる気を奪っていくのであった。
そんなところに、
「コラ、上条当麻！」
机の上でぐたーっとしている上条にかけられる一つの声。
むくっと顔だけを上げるとそこには、巨乳と広いおでこがトレードマークの風紀員、
吹寄制理が腕を組んで立っていた。
「何でせうか？」
「何でせうか？・・・じゃない！！まだお昼だっていうのに貴様何でそんなダルそうにしているの？」
「いや～上条さんにも色々と事情があるんですよ・・・ふぅあ～～・・・」

つい欠伸が出てしまう。
「上条に限ってはいつもこんな感じがするけど・・・」
まぁ、確かにほぼ毎日厄介事に巻き込まれている上条はいつもこんな感じだ。
吹寄は少し間を開けると、
「とにかく！昼間っからそんな顔されてると気分が悪くなるからとりあえず顔を洗ってきなさい」
「ええ～、吹寄勘弁してくれよ・・・」
「今日許したところで、どうせまた明日もこんな感じなんだから変わらないでしょ。ほら立つ！！」
吹寄に腕を引っ張られながら嫌々立ち上がる。
「なんやカミやん昼間っから吹寄といちゃいちゃしよって」
「ついにあの吹寄にまでフラグを立てたのかにゃ～？」

そこに青髪ピアスと土御門が来た。

「馬鹿か・・・これのどこがいちゃいちゃしてんだよ」
上条がダルそうに答えると、
青髪ピアスと土御門は顔を見合わせ、
「いやーなぁ？気付いててわざと知らないふりをしてるのか・・・」
「カミやんの場合はガチで気付いてないのかもしれへんな」
「何のことだよ？」
う～ん・・・真剣に分からない。

そこに青髪ピアスが、
「いやだからな。そんなに密着してるからいいのかって言ってるんやけど」

密着？とそこまで言われて初めて吹寄との距離を確認する。
そこまで意識した上条の腕にふにゃりと柔らかい感触がはしる。

（こっ・・・これは！？バスト！？バストなのか！？）

やっとそれに気付き慌て始めた上条を横目に先程から無言だった吹寄がそうやく口を開き、
「本当に貴様らは成長、し・な・い・・・なっ！！！」

と青髪ピアスと土御門にそれぞれおでこを喰らわす。
ガシャン！と机を巻き込みながら吹き飛んだ2人を見届けると今まで組んでいた腕を吹寄が離し、
こちらに向き直る。

「うん？どうしたんだ吹寄？」
「貴様もだ上条！！」
「ええ！？なんで俺がぐふぅあああ！！！」

床を転がる上条に、
「とにかく早く顔を洗ってきなさい」
と言い放つと吹寄はどこかに行ってしまった。

「うう・・・不幸だ」

「もう・・・次は写さしてあげませんからね」
「あはは、分かってるよ」
とある中学校。
授業を終え帰宅路についた佐天は親友の初春とともに大通りを歩いていた。

結局佐天は朝早く学校に初春を呼び出し課題を写さしてもらったのだ。
「まぁ間に合って良かったですけど」
「ありがとうね、初春」
「そうですね・・・明日あのクレープを奢って下さい」
「えぇ・・・でもあそこのクレープって高いし」
「佐天さん、私は今日朝突然早く学校に来てほしいってメールがきたから心配して行ってみたら」
「分かった分かったよ。ちゃんと奢るからそれで許して」
なんとか、丸めこめた佐天は風紀員の仕事がある初春と別れ1人、近くの商店街を訪れた。

「今日はあのお店新作は出てるかな～？」
そんな独り言をつぶやき佐天は賑わった商店街を歩く。
少し歩いて行くと知っている後ろ姿を発見した。

「御坂さん！」

そう声をかけると向こうがこちらに振り向く。

「佐天さんじゃない。今1人？」
「はい。初春は風紀員の仕事があるんでさっき別れました」
「そうだったんだ。私もさっきまでは黒子といたんだけど風紀員の仕事がって行っちゃったのよ」
そこで溜息をついた御坂に、
「御坂さん？どうかしたんですか？」
「いや・・・『あの類人猿がいつお姉さまを毒牙にかけるか黒子は心配で心配で風紀の仕事なんてやってられませんわ！！』って別れ際までずっとうるさかったからさ」
「類人猿？」
「ああ！！ええと・・その・・・ね！何でもないわよ！！」
「本当ですか？」
「ほ・・・本当だってば！あはははは！！！」
慌ててそういう御坂にいくつか疑問点があるがあまり深入りはしないでおこう。

「と・・・ところで佐天さんはこのあとは暇？」
「私ですか？バリバリ暇ですよ」
「じゃあ一緒に回らない？」
「いいですね。いきましょう！」
こうして2人は賑わう商店街を回ることにしたのだった。

第０章　それぞれの日常（後書き）

初めまして。ユウトです。自分は今回最初の投稿でしたが皆さんいかがでしたか？まだ初めということもあって不明瞭な部分があるかもしれませんが、連載をしていく中で少しずつ改善していきたいと思っているので末長くお付き合い下さい。こういう内容を書いてますから分かると思いますが自分は佐天さんが大好きです。インデックスの方でもでたりしないかな～・・・なんて。次回は早めに投稿します。それでは、また！

第1章　出会い（前書き）

ユウトです。結構長くなりましたが読んでくれたら幸いです。

第1章　出会い

午後3時。
上条の通う学校も放課後となっていた。

「へ？今なんて？」

帰宅部の生徒は校門へ赴き部活動の生徒は活動の準備を始める。

「だからですねー、来週までにこの課題を提出してもらいたいのです」

そんな中、無能力者・上条は1人、職員室に呼び出されていた。

「あの・・・何かの間違いかと思うんですけど」
「？何がですか？」

それに応えるのは上条の担任・小萌先生だ。
どうもても小学生にしか見えない身長を持つこの人は、超ヘビースモーカーのれっきとした大人である。

「ぱっと見ても夏休みの宿題レベルはあるんですけど」
「そうですね、上条ちゃんは夏休みの宿題を半分以上提出していない上に、単位の足りていない教科もありますからこれでも少ない方ですよ？」

実際夏休みの宿題に関しては仕方のない理由が存在するのだが、説明したところで信じてはくれないだろう。
いや、むしろこの先生だからこそその話はしたくない。

生徒思いの優しいこの先生だからこそ。
「うぅ…どうにかなんないですか？」
「先生も減らしてあげたいのはやまやまなんですけど…まぁでも上条ちゃんを思っての結果ですから頑張って下さいね」
結局この後、小萌先生に上手く丸め込まれた上条は渋々、課題の受け取りを承諾したのであった。

「御坂さん、この服どうですか？」
「それもいいわね…あっ、でもこれもいいかな？」
「私はやっぱりこれがいいかな～」
「佐天さんに似合ってる色ね」
「えへへ、そうですか？」
一時間程商店街を回った2人は商店街の隅にある主に女性用の服を取り扱っている店の中にいた。
「これもいいけど…今月は残り少ないから駄目かな」
「そうね、私も一週間前に黒子と買い物行って結構使っちゃったからな～」
「御坂さんの言う、結構使っちゃったからな～って想像出来ないで

すよ」
「そう？まぁ大体、４…５万くらいかな？」
「そんなに使うんですか！？いいなー御坂さん」
「そ、そう？」

御坂はともかくも佐天は無能力者な為もともと援助金が少ない。
援助金と言っても普通に暮らせる程度のものなので、少しでも贅沢をしようものならすぐに貯金が底を尽きてしまうだろう。
そんな彼女だが、そうなると休日や暇な時は、自宅にいることが必然的になってしまうだろう。
しかし実際のところ、佐天が自宅にいることはほとんどない。
なぜなら、

「それにしてもよくこんな所知ってたわね」
「まぁここの商店街は行きつけですからね」
「行きつけ？」
「はい。週に４回くらいは来てますかね」

常日頃、そうした暇な時間をウィンドウショッピングに充てているからである。

「学校が終わって初春と別れた後は、たいていここの商店街に来てるんですよ」
「そうなんだ。あきたりしない？」
「そうですね～、新商品の入荷具合で行くか行かないか決めてたりしますけど・・・ここ以外の商店街も行ったりしますからあきることはありませんね」
「なんかすごいわね」

「御坂さんはどうなんですか？」
「私は・・・黒子と月に３・４回くらい買い物に行ったり、たまにだけどウインドウショッピングをしたり・・・後は色々してる内に潰れちゃうわね」
「へ～そうなんですか」

御坂の言う色々の大部分はとあるツンツン頭の少年を探索もしくは追いかけているのに費やしているわけだが。
この後、用事があるという御坂と別れた佐天は自宅へと向かった。

途中公園を突っ切るという道で帰るとすごく早く帰宅出来るというのは調査済みなので、
佐天は比較的大きい公園へと入っていく。

「今日は久しぶりに誰かとウィンドウショッピングしたな～」

たいてい１人なので今日のようなパターンは彼女にとってはすごく嬉しかったりする。
それのせいか、いつもより陽気な気分になっていた佐天はいつもなら避けて通る、ガラの悪い集団へと知らず知らずのうちに近寄ってしまっていた。

「おう、なんだ君１人？」
「浩二どうした？おっ、めっちゃ可愛いじゃん」
「おいおい中学生だぜ？」
「そこがいいんじゃないかよ」

男達はまるで舌舐めずりするような視線で佐天を見る。

「あ・・・あの、私急いでるんで・・・」
そばを通ろうとそのまま横切ろうとすると、
「ちょっと、待とうぜ」
佐天の腕を掴んできた。
「ちょっ、離して下さい！」
「まぁまぁいいじゃんかよ」
手に力を入れるが離してくれる様子はない。
（どうしよう・・・このままじゃまずいよね・・・）
そう判断した佐天は好機を窺うことにする。
「暇ならどっか行こうぜ？」
「おい、俺が声かけたんだぜ」
「関係ないだろ。それにお前には彼女がいるだろうが」
「あいつは遊びだよ」
「遊び？お前が遊ばれてるんじゃねーのか？」
「何だと！！」
（今だ！！）
言い合いを始めた男達を見て、佐天は掴まれている方の腕に力をい

れると思いきり振りほどく。

「お、おい！」

そのまま急いで駈け出した。

「ちくしょう逃げられた！おいお前ら！あいつを追え！！！」

佐天は左に曲がると正面に草むらがあるのを見てそこに飛び込みなおのこと走り続ける。
追ってきているかは分からないがひたすらに走る。
視界があまりにも悪いせいもあって緊張感だけが、異常な程に残る。

「はぁっ、はぁっ」

息も切れ切れになりそろそろやばいんじゃないかと思ったところで、急に視界が明るくなった。

（抜けた！？）

と、思ったその時。
腰のあたりに棒状の何かがあたりそのまま前のめりになる。
彼女の視界に映っているのは、きれいな夕暮れと若干下の方に見える木々。

（え？あっまずい！？）

そう思った時には時すでに遅し。
手すりを越え、佐天は下へと落下した。

時は１０分程さかのぼる。
インデックスに頼まれていたもの購入した上条は、途中で帰宅途中だったのかは知らないが反対車線の方から来たビリビリに突然、電撃を浴びせられるというアクシデントに遭い近くの公園へと避難していた。

「はぁ、全くあいつは・・・・何でいきなり電撃なんか浴びせてくるんだ」

毎日御坂から電撃をあびせられている上条だが今回は訳が違う。
今日の上条は自宅で待ちわびている姫様の献上品を運んでいるわけで、

あまり遅くなってもいけないし献上品に何かあったとなれば明日を拝めるかすら分からない。
そもそも上条はこれといって何かしたわけではないのにこうなるのが日常だ。
そしてそれが自らの不幸体質によるものだというのも自覚している。

「うわっもうこんな時間かよ！？早く帰らないと俺の命がない・・・・つーかアイスが溶けかけてるじゃねーかよ！？」

姫様の献上品の異変に気付いた上条は走り始める。

（え～と・・・確かここの道を真っすぐ行って・・・）

真っすぐすすんだ先には左手が森林、右に高い壁があった。

（ここだここだ。この道を行くと近道なんだよな）

こうして買い物をした帰りには、ここの公園の近道を普段から利用しているので、
すぐに目的の場所へと行きつく上条。

そのせいか少し陽気な気分になっていた彼は、

「きゃあああああああああーーー！！！！？？？？？」

という突然の声に腰を抜かしぺたんと座りこんでしまった。

（なんだ！？）

急いで上を確認しようと上を見ようとした彼に向かって彼女は狙ったかのようなタイミングで落ちてきた。

（駄目だ！！）

目を瞑り次の衝撃に備えていた彼女が最初に感じたのはグシャリという柔らかい感触だった。

（・・・え？）

全く想定外のことだったので、しばしそのまま固まる佐天。

ぼーっとした時間が続き、

「ん・・・うぅ・・・」

という誰かの呻き声で我に帰った。

下を見ると仰向けになった少年がそこにいた。
「わっわわわわ！ごめんなさいすいません本当に申し訳ありません！！！」
急いで飛び退くとよろよろと立ちあがる少年に謝罪を述べる。
「う～ん・・・あれ？」
立ち上がった少年はじーっと佐天を見てくる。
「あの・・・本当に大丈夫ですか？」
いよいよ本当に心配になってきた佐天は彼の顔を覗き込むように尋ねた。
するとようやく我帰ったのかそれらしい返答が返ってきた。
「ん？ああ大丈夫だ」
「そうですか・・・良かった」
「そういえば君は大丈夫？」
「あ、はい。おかげ様で」
予期せぬ質問に驚きを感じる。
（迷惑をかけたのは私なのに・・・）
「そういえば・・・」
「？なんですか？」
「何であんなところから落ちてきたの？」
「あぁ・・・その、不良の人達から逃げてたら気づかなくてそれで」
「そうなんだ・・・まぁこの公園は不良が多いからな。気をつけた

方がいいぞ？」
「はい、ありがとうございます」
初対面の人だが自然に好感の持てる人だなと佐天は素直にそう感じた。
ふと、片端に落ちている自分のかばんに気付きそれを取ろうと一歩踏み出したその時。
「っ痛！」
右足に痛みを感じた佐天はその場にうずくまってしまう。
「おい！大丈夫か？」
「あ、すいません。大丈夫です」
あまり心配をかけないようにと言ったがその様子から大丈夫ではないのはバレバレだった。
手を伸ばしかばんを手にするとゆっくり立ち上がり彼に向き直り、
「今日はありがとうございました」
「家は近いの？」
「え？」
「家ってここから近いの？」
「そんなに離れてませんけど・・・歩いて１０分くらいですかね」
「そっか・・・」
彼しばらくポケットから取り出した携帯の画面に視線を落とし、それからパチンと閉じるとこう言った。
「その足じゃ心配だから家まで運んでやるよ」

そう言われて佐天は自分のかばんに視線を落としそれからまた彼に視線を向ける。

「そんなに重くないですから大丈夫ですよ」

ぎこちなく笑ってみせるが彼は別の反応を示した。

「いや、そうじゃなくて・・・」

「？」

頭にはてなを浮かべる佐天に少年は、

「ほら、かばん横に持って」

「え、はい」

意味を理解できない佐天はいわれるがままにし、

「よい・・・しょっと！」

「ふえ！？」

我ながら情けない声を出したと思ったがそれ以上に彼がした行為の方に呆気を取られてしまっていた。

それもそのはず。

前にいた彼がいきなり背を向けたかと思うと突然おんぶをしてきたからだ。

「そんじゃ、行くか」

「えええええと！あの・・・だ、大丈夫ですから」

「何言ってるんだよ。怪我してる女の子見てほっとけるほど俺は非

常じゃないんだよ」
「でも・・・」
「いいから任せろって」
「・・・は、はい・・・お願いします」
「おう！んじゃ行くか」

ちなみに彼、上条は背中で少女が顔を真赤にしていることにはもちろんのこと気付いていない。

「そういえば自己紹介がまだでしたね」
「そういえばそうだな。俺は上条当麻。高1だ」
「佐天涙子です。中1です」

少し歩いた所で2人は簡単な自己紹介を済ませる。
本来なら最初の時点で済ませておくべき会話なのだが、そういう訳にもいかなかった。
理由は単純。

（男の人におんぶされるなんて・・・初めてだな）

なんていう乙女心全開の思考が頭の中を駆け巡っていたからである。

（それに・・・上条さんの背中って広い・・・）

自然と顔をうずめたくなるが流石にそれはやめた。

ちなみに。
これはおぶっている側、上条にも当てはまっている。
（うわわわ・・・思ったままに行動したけど・・・何か恥ずかしいな）
背中で佐天の鼓動を感じながら上条もまた、赤面していた。
（それに、たぶんこの柔らかい感触は・・・あれだよな）
こちらもこちらで青春真っ盛りの少年なので仕方ないと言ってしまえば仕方ない。
そういう事があって両者ともなかなかその話を切り出せなかったのだった。

「あの・・・上条さんには兄弟はいるんですか？」
「ああ、妹が１人。学園都市の外にな」
「私も学園都市の外に弟が１人いるんです」
「そうなんだ。っていうことはお互い長男長女ってことだな」
「そうですね。私ここに来るときすごく弟が心配だったんです」
「心配？」
「両親が共働きで帰りが遅くなるんで弟のことも含めて家事とかはほとんど私がやってたんですけど」
「それはすごいな」
「えへへ・・・今年に入って私の学園都市入学が決まってからこれから弟が家のことを出来るかが、すごく心配なんです」
「・・・優しいお姉ちゃんなんだな」
「えっ！？そ、そんなことないですよ！」

「だってそうだろ？自分の心配じゃなく、学園都市の外にいる弟の心配が出来るなんてすごいじゃないか」
「はい・・・」
男の人にこんな事を言われたのも初めてだ。
ますます赤面する佐天に上条は言う。

「佐天はいつもあの公園を通って学校行ってるのか？」
「いえ、買い物した帰りに通ってるんです。ちょうど私の行きつけの商店街からだとあの公園えお突っ切るのがすごい近道なんで」
「へ～、じゃあ俺と一緒だ」
「え？上条さんもなんですか？」
「うん。俺もスーパーで買い物をした帰りだとあの公園を通るのがすごい近道なんだ」
「じゃあ、２人とも同じ理由であの公園を通ってたんですね」
「だな」

先程の緊張感もいつの間にか消え、すっかり打ち解けた２人。
とは言ってもすでに１０分くらいが経過しており、

「あ！あそこが私のマンションです」

佐天としてはもう少し話していたかったのだが、これ以上彼に迷惑をかけるのは気が引ける。
階段を上り扉の前までおぶってもらったところで下してもらう。

「今日は本当にありがとうございました」
「どうってことないさ。足は大丈夫か？」
「もうだいぶ痛みも引いてきたんで大丈夫です」

「そっか・・・それなら良かった」
「はい」

扉を開け玄関に入ったところまで見届けた上条は、

「そんじゃ、またな」
「はい、さようなら」

自分の部屋に入りかばんから携帯を取り出した佐天は、

「あっ！電話番号聞いてない！」

まだ少し痛みのある足に構わず急いで外にでる。
すると大通りを走って行く上条の背中が目に入った。
佐天は残念そうに、

「もう・・・電話番号聞きたかったのになー」

そう呟いた。

マンションの階段を上りながら上条は先程のことを思い出す。

（それにしてもびっくりしたな～・・・まさか上から降ってくるなんて）

ここまで印象に残っていのは、ただ単に上から降ってきたことだけではない。

彼は＜覚えて＞いないが、現在居候中のインデックスが佐天と同じ状況下で降ってきたということを、

彼の記憶の断片がそう印象づけているのかもしれない。

不思議な感覚に包まれながらも無事自宅に到着した上条は、扉を開けまず見たのは、

「とうまのばかーーーー！！！！」

インデックスの巨大な口だった。

「ひぃぃ！！？？インデックスさん！？ちょっ、ちょっと落ち着いて下さい！！」

「これが落ち着いていられるわけがないんだよ！インデックスがお腹を空かして待ってるっていうのにとうま一体どこをほっつき歩いてたの！」

「そ、それはその上条さんにも事情がありまして・・・」

「とうまいつもそればっかりなんだよ・・・今日は許してあげる」

「おお！！さすがイギリス清教に仕えるシスター！！」

久々のインデックスの優しさに感動する上条。

「とうまとうま。ところでアイスは？」

「ああ、そうだったな。見よ、これが姫にと汗水流して入手した献上・・・ん・・・？」

おかしい。
アイスクリームの入った袋がない。

「とうま・・・アイスは？」
「え・・・あ、あの」
冷汗が上条の首筋から垂れる。

「結局とうまは私を待たせただけじゃなく、そのアイスまで忘れたんだね」
「ま、待ってくれ！確かにさっきは手に」
とそこで気付く。

「あああ！！！佐天が降ってきた時に！」

何故今まで気づかなかったんだと、自分を問い詰めたいところだが今はそれどころではない。
目の前の邪悪なオーラを放つ少女をどうにかせねば。

「インデックスさん！ほほほ本当に申し訳ありませんでした！！」
「・・・・・・」
「インデックスさん？」

しばらく口をつむいでいたインデックスはようやくその口を開いた。

「とうま」
「な、何でせうか！？」
「本当は言いたいこと聞きたいことがたくさんあるんだけどとうま

は疲れてるみたいだから今日は１つだけ」
「ん？」
インデックスははぁーと意気を吸い込み、
「ばかーーーー！！！！」（ガブリ）
本日二度目の噛み付きが炸裂した。

「ぎぃぃやぁぁーーー！！！結局こうなるのかよ！！ふ、不幸だーーーーー！！！！」

今日もまた、日の沈む学園都市の空に彼の叫び声が響く。

「はぁぁ、今日は疲れたな～」
お風呂に入り髪の毛をとかした佐天はそのままベッドに身を投げる。
しばらくぼーっと天井を眺めていた佐天はぼそっと、
「上条・・・・当麻さんか・・・・」

今日は初めてのことが多すぎてびっくりの一日だったせいか、
上条の顔が頭から離れない佐天。

「いい人だったな・・・」

机の上で携帯がブルブル震えているのにも気づかず。

「また・・・会えるかな～」

そんな願いを胸に、
無能力者・佐天涙子の一日が終わる。

第1章　出会い（後書き）

どうでしたか？投稿2回目でだいぶ長いものを書いてしまいましたが、あきずに読んでいただけたならそれに越したことはありません。不明瞭な部分がありましたらレビューなどに投稿お願いします。いや～やっぱり、会話のところは難しいですね。他の方々の作品を見て勉強しないと。ではでは、また次回！次は3日後くらいに投稿します！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0841z/

とある2人の無能力者

2011年12月6日23時49分発行